

「故郷」を訪ねて

浅井 登紀子*

2020年3月、私は調査地で出会った人々の「故郷」を訪問するため、スリランカ北部州のマンナール県に向かっていた。

私の主な調査地であるスリランカ西海岸に位置するプッタラム県には、内戦中に反政府タミル武装勢力LTTE (Liberation Tigers of Tamil Eelam) によって北部州の故郷を追放されたムスリムの人々が多く避難し、その後も暮らし続けている。彼らからは避難後の苦労や故郷への郷愁が語られる一方、すでに生活基盤を築いているプッタラムと故郷を比較して、帰還するつもりはないという声も聞かれた。私の主な関心は、プッタラムで暮らす北部州出身のムスリムの人々の生活にあったが、話を聞く中で、彼らの故郷を訪ねて帰還した人々の話も聞いてみたいと思うようになった。ここでは、そこで垣間見ることのできた人々の現在や感じたことを記述したい。

スリランカ内戦とムスリムの追放

スリランカは多民族国家である。全人口の約75%を占めるのは多くが仏教徒でシンハラ語を話す「シンハラ」、次に多いのはタミル語を話しヒンドゥー教徒が多数を占める

「スリランカ・タミル」と、南インドから移住したプランテーション労働者の子孫とされる「インド・タミル」を合わせた「タミル」と呼ばれる人々、タミルに次ぐ第2のマイノリティが、人口の約9%を占め一般的に「ムスリム」と呼ばれる「スリランカ・ムーア」だ [Department of Census & Statistics, Ministry of Policy Planning and Economic Affairs 2015]。

スリランカでは1983年から2009年にかけて、タミル多数派地域である北部・東部州の分離独立を求めるLTTEと、多数派シンハラ支持を得たスリランカ政府軍との間で民族紛争がおこなわれた。シンハラ対タミルの構図で語られるスリランカ内戦でムスリムの被害が取り上げられることは少なく、内戦後の復興支援でもムスリムは周縁化され続けてきた。

LTTEによる北部州からのムスリム住民の追放がおこなわれたのは1990年のことである。背景には80年代のムスリム政党の設立をきっかけにLTTEの反ムスリム感情が高まったことなどがあるといわれる。当時75,000人以上いたとされる北部州のムスリ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ム住民は、数時間から2日間の間に故郷を追放され国内避難民となった。追放による人的被害はなかったものの、着の身着のまま避難を余儀なくされた人々は避難後も困難な生活に直面した。内戦中多くの人々はLTTE支配下の北部州に帰還できず、内戦終結後も政府による帰還支援の対象とはならなかった。また、避難生活の間の故郷の環境の変化や、避難先で生活基盤をすでに築いていることから、現在も避難先の地域にとどまっている人が多いとされる。

内戦中に帰還した人々

マンナール到着の翌日、県庁の車で目的地であるE集落到連れて行ってもらった。30分ほどで到着し、まずは地域の行政官であるタミル女性の案内で集落をまわった。

最初に出会ったのは、夫と2人の子どもと暮らす28歳の女性だ。彼女の両親と上の兄弟は追放後クルネーガラ県に避難し、彼女が8歳の頃に家族でE集落到帰還した。帰還後は主に母親が一家の大黒柱として、長期にわたる海外出稼ぎで家族の生活を支えた。それでも生活は苦しく、20歳の弟以外の兄弟は7～9年生で就学を中断したという。

タミル人口の多い北部州の中でマンナール県は比較的ムスリムの多い地域であったが、E集落はその中でも大きいムスリム集落で、教育レベルも高く公務員やビジネスで成功した人が多いという。E集落出身者が集住するプッタラムのN集落も、北部州の他地域出身者から同様のイメージをもたれていた。一方で、E集落には漁業や林業を生業にしてい

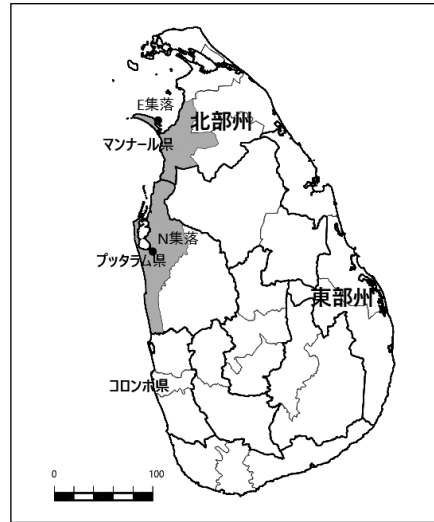


図1 スリランカ地図

た人々もおり、その中には避難先で生業を得ることが難しく、内戦中でも帰還した人もいるという話も耳にした。

彼女は「ここにいる人は貧しい人ばかり。子どもの頃から漁業をして大人になれば日雇いの仕事。あっち(N集落)の人は外国やコロンボにお店をもっているような人たち」と話していた。

次に訪問した家の人々は、私の顔を見るなりやけに親しげな笑顔を向けた。不思議に思っていると、20歳の娘が「この間N集落での結婚式に来てたでしょ？私たちもそこにいたのよ」と話してくれた。N集落のすぐ近くに結婚式場があり、私はそこで披露宴に参加したことがある。

この家に住む49歳の女性は、追放後プッタラムで1年ほど避難生活を送ったのち、漁師の夫と子どもとともに帰還した。両親がN集落到住んでおりプッタラムには時々訪



写真1 中東の支援で建てられた住宅

問するという。N集落の人々については「向こうが気に入っていると言っているよ。家を建てて幸せに暮らしているし、子どももいるしね。N集落で子の結婚相手を探しても、向こうで家を建てるように言われるんだ」と笑いながら話していた。帰還後の経緯を聞いてると相当の苦労もあったようだが「私たちはここが好きなんだ」という言葉が印象に残った。

「新しい場所のよう」

数軒を訪ねお昼をまわったところ、訪問を約束していたAさんによく会うことができた。36歳のAさんは、3年前にできた女子マドラサに2人の娘を通わせるため、三輪タクシー運転手の夫とともに1年半前にN集落から移住した。プッタラムのマドラサよりも費用が安くよいのだという。AさんはN集落に結婚時に建てた家があり、娘の就学が終わればそちらに戻るつもりだ。自身と夫の親や兄弟もN集落に住んでいる。プッタラムでの暮らしと比べると、こちらの方が

不便だという。幼少期に故郷を離れたAさんにとって、ここは「新しい場所のよう」だといい、N集落と比べて知人も少なく生活面で困ることもあるそうだ。

内戦中の帰還と比較すると、内戦終結後の移住にはよりさまざまな背景があるようだった。話を聞いた人々の中には、愛着をもつ故郷での生活を望んで帰還した人々もいれば、就学・就労のための帰還や一時的な滞在をする人々もいた。

Aさんの案内で娘の通うマドラサに連れて行ってもらった。寄進されたその住宅の元所有者は現在コロンボで暮らしているという。出会った4人の女性の先生は20～30代とみな若かった。話を聞いた2人の先生は避難後プッタラムで育ち、同じくE集落出身の親をもちプッタラムで育った夫と結婚後、夫の仕事の都合で数年前にE集落に移住したという。「こことプッタラムとどちらが好き？」と尋ねると、笑って「夫のいるところにいなきゃならないからね」と返された。先生同士の仲のよい雰囲気や、仕事についての話しぶりからは充実した様子が伝わってきた。

「生まれた土を忘れてはならない」

最後に訪問したのは72歳の老夫婦の家だった。二人はともに定年まで教員として勤めあげ、6人の子どものもみな教員をしている。妻のHさんはプッタラムに避難した数ヵ月後に政府に異動を言い渡されてE集落に帰還し、2年ほどそこで暮らした経験をもつ。その後プッタラムに異動となり、内戦終結の翌年に夫とともに結婚時に建てた家に帰還し

た。内戦中数人の先生と帰還した当時、LTTEはいなくなっていたが、政府軍が滞在していたため学校で寝泊まりしていたこと、仕事のために男性が徐々に帰還を始め、その後少しずつ学校に子どもが戻ってきたことなどを話してくれた。

「私たちはもうここから離れることはない。生まれた場所でしょう。」Hさんは、高齢で移動も大変だし…と言いつつ「死ぬときは自分たちの土地で死ぬべきだ。母親と生まれた土のことは忘れてはならない」と、はっきりとした口調で言った。「E集落は小さいけれど発展した村なんだ。」「みなよく勉強した人たちだ。」Hさんの言葉からは、故郷への誇りが感じられた。

別れ際に握手をした時、Hさんは両手にぎゅっと力を込めて「この話は日本人たちのために話したんだ。役所に聞いてもらうためじゃない。立派な本にしないといけないよ」と言った。

おわりに

帰り道、フィールドで出会った人やこれから出会う人たちのことを考えながらHさんの別れ際の言葉を思い出し、身の引き締まる思いがした。

たった1日の訪問だったが、E集落で出会った人々とプッタラム、特にN集落とのつながりが私には印象的だった。プッタラムで生まれ育った世代にとっても、親たちの故郷は就労・就学機会や結婚相手を得られる場として認識されていた。E集落の人々にとってのプッタラムも同様といえる。強

制移住や帰還によって故郷と避難先との関係が切れるわけではなく、親族関係などを通じて「故郷」のような空間がより広がりをもつものになっているのかもしれない。こうした状況の背景には、内戦終結により北部州との自由な往来が可能になったことがあるだろう。

一方で、もうひとつ印象的だったのは、同じ故郷をもつ人々の間でも共有されていない経験や思いが多いのではないかということだ。途中からAさんと一緒に近所の人々の経験を聞く中で、Aさんも知らなかった話に驚く場面がたびたびあった。北部州出身のムスリムといっても、現在までの経験は一様ではない。紛争を経験しなかったシンハラ多数派地域の避難先の人々にとっては、彼らの境遇を理解するのはさらに困難だろう。

この境遇を共有しないプッタラムの人々との会話では、北部州出身のムスリムが「避難民」として支援の恩恵を受けてきた（ように見える）ことへの複雑な感情の表明や、彼らのことを「よそ者」だというニュアンスで話す場面があった。その時に地元の人が引き合いに出すのが、彼らは故郷とプッタラムを「行ったり来たりしている」という話だ。彼らが築いてきたプッタラムと故郷とのつながりは、地元住民にとっては複雑な感情を喚起させるものなのかもしれない。

一方で、そうした複雑な感情を抱えつつも、北部州出身のムスリムの人々と地元住民が地域でともに暮らす中で関係性を築いている様子を垣間見る場面もあった。そうした北部州出身のムスリムの人々とプッタラムの

人々とのつながりについては、また改めて論
じることにしたい。

引用文献

Department of Census & Statistics, Ministry of

Policy Planning and Economic Affairs. 2015.
Census of Population and Housing 2012.
<[http://www.statistics.gov.lk/pophousat/
cph2011/pages/activities/reports/finalreport/
finalreporte.pdf](http://www.statistics.gov.lk/pophousat/cph2011/pages/activities/reports/finalreport/finalreporte.pdf)> (2022年5月16日)

世代を超えて継承された相互扶助「結」

—世界遺産白川郷における人々の語りに着目して—

奥田真由*

深々と雪が降り積もる2021年1月19日、
筆者は岐阜県大野郡白川村荻町を訪れた。前
日の大雪により路側帯には雪が高く積み上げ
られ、時刻は午後7時前であったがあたり
は暗く静まりかえっていた。

白川村荻町は「白川郷」という名で知られ
ている一大観光地であり、その名前を聞けば
大きな合掌造り家屋を思い浮かべる人も多
いであろう。白川村は岐阜県の北西部に位置
しており、庄川流域に集落は点在している。荻
町はちょうどその中間に位置する集落であ
る。一般的に白川郷と呼ばれるのは白川村の
なかでも荻町のことであり、地域住民は観光
業に従事あるいは関係している者がほとんど
である。荻町では1965年前後から観光客が
徐々に増加し、その後合掌造り家屋の民宿や
飲食店、土産物屋は増加し現在に至る。新型

コロナウイルスによる影響を受ける前の
2019年、荻町では過去最高の観光客数であ
る約215万人を記録した。

筆者は荻町でのフィールドワークを通して
人々の生活空間、つまり居住環境ともいえる
合掌造り家屋がそのまま観光資源となった過



写真1 荻町区一望風景

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科